

第5章 現在の和歌山と将来



野球王国

時代 区 分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

和歌山中学校の活躍

和歌山県の野球の歴史に大きな第一歩を記したのは、和歌山中学校(和中, 桐蔭高校)の野球部の活躍です。1915(大正4)年8月, 全国中等学校優勝野球大会の第1回大会が開かれると, 和歌山県の予選を勝ち抜いて全国大会に出場しました。その後も, 1928(昭和3)年の第14回大会まで連続して出場し, 毎年「和中強し」といわれてきました。特に, 1921年の第7回大会に, 北島好次投手らが健闘して優勝旗を和歌山県に持ってきました。また, 翌年の第8回大会も井口新次郎投手らのがんばりで連続優勝して県民を喜ばせました。

当時は現在のように専任の監督は置かず, とくどき大学生の先輩から指導を受ける程度で, 主将がチームをまとめ, 監督を務めました。そのため, 主将の人がらと熱意が選手一同に大きな影響を与えました。

1924年4月に選抜大会もはじまり, 1927年の第4回大会では, 名投手小川正太郎の好投で優勝しました。小川は早稲田大学に進み, 早慶戦で神宮球場へ試合を見にきた人々をわけました。和中は, 和歌山県の中等学校の野球をリードしてきました。



全国優勝旗をかこむ和歌山中学校(大正10年)

海草中学校の台頭

圧倒的な和中の強さに発奮して, 「打倒和中」をかかげてがんばる学校もでてきました。海草中学校(向陽高校)や和歌山商業(県立和歌山商業高校)などです。猛練習で実力をつけ, 1929年の夏には, 海草中学校が和中を破って甲子園に初出場し, いきなり準優勝しました。

その後, しばらく和中・和商・海草の三校時代がつづきますが, 1931年春ごろから海南中学校(海南高校)も追いつき, 4校による対抗時代を迎えます。1933年春の選抜大会には, 4校がそろって甲子園に出場するというすばらしい成果をなしとげます。

しかし, 1927年春の和中の優勝以降, 全国制覇からは遠ざかってしまいました。その沈黙を破ったのは, 1939年夏の選手権大会での海草中学校の活躍でした。左腕島清一投手は, 全試合で相手チームを完封



全国優勝の海草中学校（優勝旗をもつのは島投手）（昭和14年）

施要項から球技の種目が取り除かれ、県内の各校野球部は解散しました。戦局はますます激しくなり、島清一ら甲子園をわかせた多くの名選手も戦場で尊い命を落としました。

戦後の野球王国復活から現在

1945年ごろの和中グラウンドは、半分はさつまいも畑で、スタンドは防空壕、バックネットはないというありさまでした。また、校舎の半分が兵舎になっていました。このようなとき、1946年夏の選手権大会が復活されることが発表されました。食糧事情も悪く、野球どころではなかったのですが、各学校では、野球の好きな中学生は練習をはじめました。用具は先輩の残してくれたグローブをみんなで使い、破れたボールは全員で手分けしてぬい、折れたバットは釘で止めてテープを巻き、大切に使いました。みんな空腹に悩まされながらも全国大会への出場を夢見て、暗くなるまでボールを追い、グラウンドをかけ回りました。

都道府県の予選を勝ち抜いた全国大会への出場校は、食糧持参で集まりました。試合で敗れて郷里に帰るとき、相手校に残った食糧を贈って健闘を祈ったといいます。こうして球児たちの野球にかける熱い思いが後輩に引き継がれていきました。

学制改革により、1949年4月、中等学校の大会は高等学校野球大会と改められて続けられることになりました。この間、和歌山県の代表校も、先輩たちの残した輝かしい歴史を背負って、試合にいどみ、好試合を重ねましたが、なかなか全国優勝はできませんでした。

県民が待ち望んだ全国優勝は、箕島高校によって1970～79（昭和45～54）年の間に春の選抜大会で3回、夏の選手権大会で1回なしとげられました。なかでも1979年の第61回選手権大会における星稜高校（石川県）との延長18回に及ぶ息がつまるような熱戦は、全国の高校野球ファンを茶の間にくぎづけにした3時間50分の名勝負でした。この年箕島高校は春夏連続優勝を成しとげました。

その後は、智辯学園和歌山高校が全国優勝して「野球王国」の名を引きついでいます。また日高高校中津分校が1997（平成9）年の選抜大会に、全国で初めて分校として出場を果たしました。

し、なかでも準決勝の対島田商業（静岡県）戦と決勝の対下関商業（山口県）戦ではノーヒット・ノーランの快挙でした。海草中学校は、その次の1940年にも真田重蔵投手を盛り立てて2連覇しました。

1941年、アメリカ・イギリスとの開戦の危機も迫ってきたため、文部省は県外試合の禁止を発表し、全国大会も中止されることになりました。すでに各地で県予選がはじまっていたのですが、選手たちは泣きながらあきらめたといいます。

1943年、文部省の学徒体育訓練実